

建設省職員宿舎新築工事に伴う
天神遺跡第8次発掘調査報告書

1996年3月

出雲市教育委員会

建設省職員宿舎新築工事に伴う
天神遺跡第8次発掘調査報告書

1996年3月

出雲市教育委員会

序

出雲市には、多くの遺跡が平野内にあることが知られていますが、そのなかでも天神遺跡は、弥生時代からの出雲平野における中心的な集落の一つと考えられている遺跡です。これまでにも数度にわたって調査が実施されており、近年の調査では弥生時代の環濠と思われる遺構も発見されるなど、遺跡の様子がすこしずつ具体的になりつつあります。今回の調査では、古墳時代から近世にいたる遺構・遺物が検出されており天神遺跡の変遷を考えるうえで興味深い資料といえます。

本書が、郷土の文化財保護や研究資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり協力いただきました関係者に心から感謝いたします。

平成8年（1996）3月

出雲市教育委員会
教育長 鐘 築 芳 信

例　　言

1、本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、出雲市教育委員会が平成6年度に実施した建設省塩治有原北宿舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2、発掘地は次の通りである。

犬神遺跡　島根県出雲市塩治有原町1丁目70-1、2

3、調査組織は次のとおりである。

調査主体　出雲市教育委員会

事務局　野津建一（文化・スポーツ課長）

調査員　松山智弘（文化・スポーツ課主事）

調査指導　田中義昭（島根大学教授）、広江耕史（島根県教育委員会）

4、本書で使用した方位は磁北をしめす。

5、本遺跡の出土遺物及び実測図・写真は出雲市教育委員会で保管している。

6、本書の執筆・編集は調査員が行った。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次・写真図版目次

第1章 調査の経過と遺跡の概要	1
第2章 位置と環境	2
第3章 天神遺跡の概要	6
第4章 調査の概要	11

写真図版

挿図目次

第1図	建設省職員指令新築工事に伴う埋蔵文化財発掘	第20図	SK02	19
	調査地平面図	第21図	SK03	19
第2図	遺跡の位置と周辺遺跡	第22図	SK04・SK05	20
第3図	天神遺跡と周辺遺跡	第23図	SK06	20
第4図	天神遺跡調査位置図	第24図	SK07	20
第5図	遺構配置図	第25図	SK08	21
第6図	調査区上層図	第26図	SK09	21
第7図	SD01 土層図	第27図	SK09出土遺物	21
第8図	SD01 出土遺物	第28図	SK10	21
第9図	SD02 断面図	第29図	SK11	22
第10図	SD02 出土遺物	第30図	SK11出土遺物	22
第11図	SD03・SD04 上層図	第31図	SK12	22
第12図	SD04 上層図	第32図	SK12出土遺物	22
第13図	SD04 出土遺物	第33図	SK13	23
第14図	SD05 断面図	第34図	SK14	24
第15図	SD06 上層図	第35図	SK15 棱出状況	24
第16図	SD04・SD07 上層図	第36図	SK15	25
第17図	SD07 出土遺物	第37図	SK15出土遺物1	25
第18図	SK01	第38図	SK15出土遺物2	26
第19図	SK01 出土遺物			

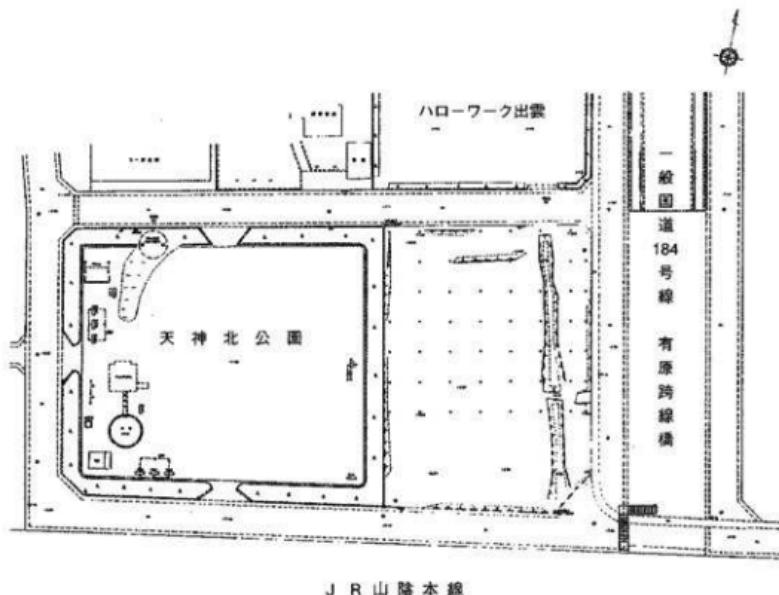
写真図版目次

図版1-1	調査前全景	図版9-1	SK15 遺物出土状況
2	完掘状況（東から）	2	SK15 完掘状況
図版2-1	完掘状況（南から）	図版10-1	SD01 出土遺物
2	完掘状況（SD03・SD04周辺）	2	SD02 出土遺物
図版3-1	完掘状況（調査区南西部分）	3	SD02 出土遺物
2	SD01 土層堆積状況	4	SD02 出土遺物
図版4-1	SD02	図版11-1	SD07 出土遺物
2	SD02 遺物出土状況	2	SD07 出土遺物
図版5-1	SD03 土層堆積状況	3	SD07 出土遺物
2	SD04 十字堆積状況	図版12-1	SK01 出土遺物
図版6-1	SD07 上層堆積状況	2	SK02 出土遺物
2	作業風景	3	SK09 出土遺物
図版7-1	SK03 半採状況	4	SK11 出土遺物
2	SK05・SK04 半採状況	5	SK12 出土遺物
3	SK07 完掘状況	図版13-1	SK15 出土遺物
図版8-1	SK09 完掘状況		
2	SK13 堆積状況		
3	SK14 完掘状況		

第1章 調査の経過と遺跡の概要

平成6年1月建設省職員宿舎建設の計画が判明し、建設省出雲工事事務所に予定地が周知の遺跡範囲であることを伝えた。その後協議を行い、遺跡の状態を把握するため試掘調査を実施することとした。試掘調査は平成6年3月7日より4カ所のトレンチを設定し行った。その結果、各トレンチで溝あるいはPit状の遺構を確認した。また、出土遺物は須恵器・土師器・土師質土器が出土しており、奈良時代から中世にかけての集落遺跡で工事予定地全体に広がっていることが判明した。このため市教育委員会としては調査体制を整え平成6年度発掘調査を実施することとした。

平成6年5月23日に建設省と出雲市とで契約を締結し、6月15日より現地調査を開始した。



第1図 建設省職員宿舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査地平面図

第2章 位置と環境

山雲平野は鳥根半島と中国山地に挟まれた、宍道湖・中海低地帯の西端に位置し、斐伊川・神戸川の沖積作用によって形成されたもので、現在は神戸川が日本海に注ぎ、斐伊川は東流し宍道湖に至る。このような景観は近世以降に形成されたもので、それまでは、神門水海と呼ばれる潟湖が平野に入り込んでおり、斐伊川も西流して神門水海に注ぎ込んでいた。宍道湖の汀線も現在より西にあり平野の規模は現在よりかなり小さいものであったと思われる。

出雲平野における最も古い遺跡としては、大社町の菱根遺跡と古代から中世にかけての大規模な貝塚で知られる上長浜貝塚で、縄文早期～前期の土器が出土している。このように北山南麓の一角と山雲砂丘上の限られたところにのみ遺跡が存在する。縄文中期の遺跡は確認されておらず、後期になると大社町原山遺跡が、晩期になると大社境内遺跡が出現する。また平野の中心部でも矢野遺跡からは後期末と晩期の土器が、三田谷遺跡でも晩期の土器が出土している。

神西湖南岸では、御領田遺跡で縄文後期の堅穴住居1棟が検出されており、包含層より比較的まとまって遺物が出土している。また、三部竹崎遺跡・三部八幡下遺跡では縄文晩期の上器が採取されている。矢野遺跡や原山遺跡・三部竹崎遺跡では弥生前期の遺物も出土している。

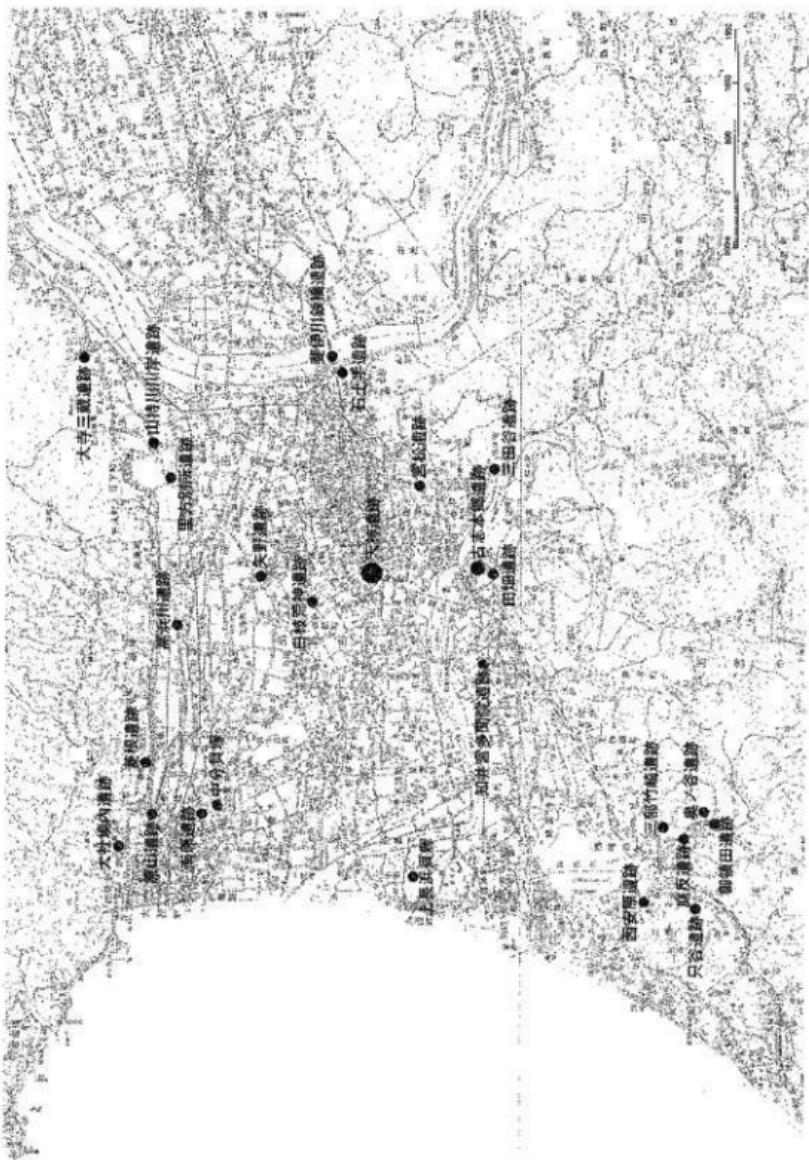
このように縄文から弥生前期にかけての遺跡は限られており、本格的な集落經營がなされるのは弥生中期になってからである。平野中心部ではひきつづき矢野遺跡から小山遺跡などの四経遺跡群は弥生時代を通じて豊富な遺物が出ており、中期中葉になると新たに犬神遺跡と白枝荒神遺跡が出現する。

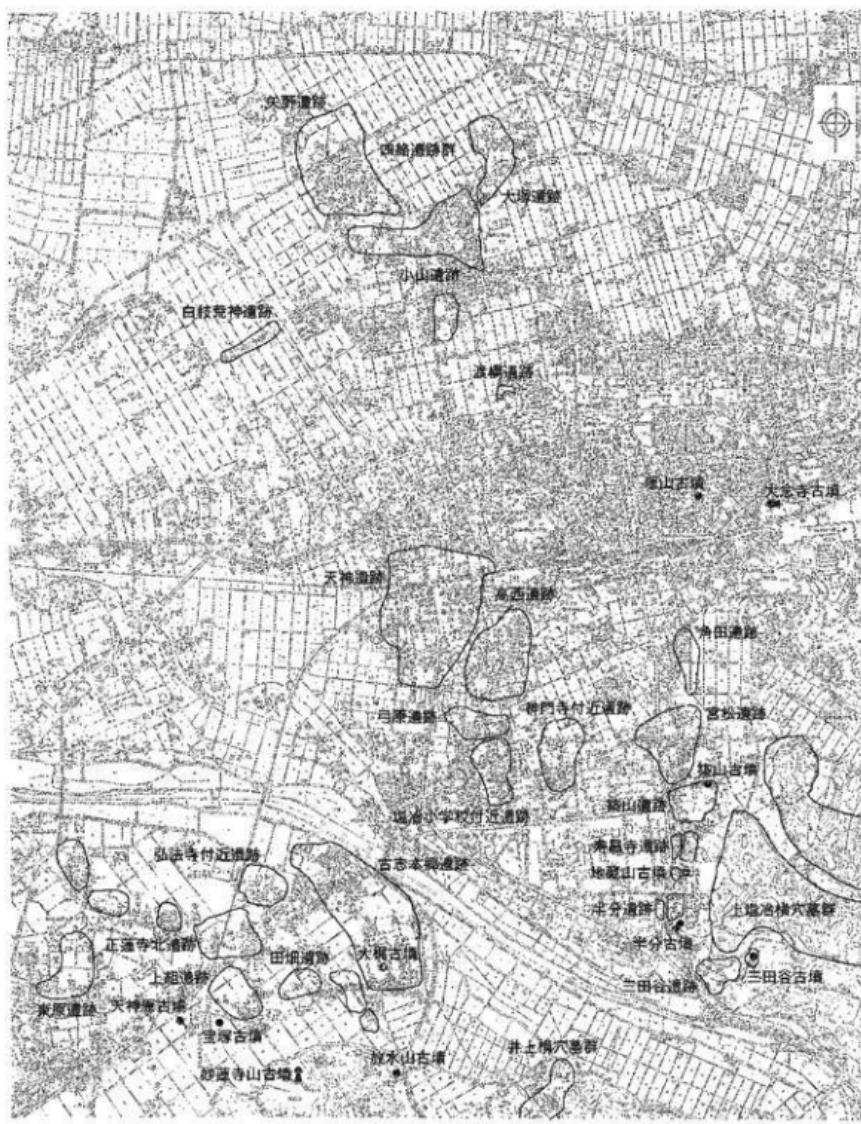
神戸川左岸においては弥生時代中期中葉になって集落が確認されている。山畠遺跡・知井宮多聞院遺跡が最初の集落ということになるが、この時期の遺物の出土量は比較的少ない。中期後葉になると山畠遺跡・知井宮多聞院遺跡にくわえ古志本郷遺跡でも本格的に集落が営まれるようになる。古志公民館建設に伴う古志本郷遺跡の調査では中期後葉の住居址が3棟検出されており、緑色凝灰岩・水晶・玉髓・珪化木・黒曜石などの石材と石鋸などが出土しており、玉作が行われていた可能性が指摘されている。山畠遺跡でも同じ時期の住居址が検出されており、ここでも瑪瑙や石鋸が出土している。

斐伊川によって形成されたと思われる扇状地では、後期には平野北東部の山持川川岸遺跡や里方別所遺跡や斐伊川鉄橋遺跡・石上手遺跡が出現し、この4遺跡は弥生終末から古墳時代初頭の遺物が多く出土している。

また、神西湖南岸では、弥生時代中期の遺物というのはあまり採取されておらず、後期になっ

第2圖 遷跡の位置と周辺道路





第3図 天神遺跡と周辺遺跡

て庭坂遺跡・竹崎遺跡・貝谷遺跡・雲部遺跡など多くの遺跡が確認されている。

このように弥生後期前葉には各所にはほぼ集落が出そろうようになり終末にかけても継続している。各遺跡ともこの間の遺物の出土量は豊富で、天神遺跡や古志本郷遺跡では集落を取り囲む環濠と思われる溝も検出されている。

これらを背景に後期末から終末にかけて四隅突出型墳丘墓6基などからなる西谷墳墓群が形成される。西谷3号墓・4号墓からは吉備の特殊土器が出上しており吉備との強い結びつきが推定される。矢野遺跡からも特殊土器が出上しており、この時期の拠点的な集落と考えられている。

しかしながら古墳時代にはいると平野中心部の矢野遺跡や天神遺跡など中心的な集落では遺物の量が極端に減少する傾向にある。神戸川左岸の遺跡は古墳時代にはいると急激に衰退するようで、いわゆる小谷式といわれる土器の出土数は弥生終末期に比べて非常に少なくなることが注意される。

石上手遺跡・斐伊川鉄橋遺跡・山持川川岸遺跡・里方別所遺跡など斐伊川流域の遺跡では古墳時代初頭にかけての遺物も比較的多く出土している。

一方神西湖南岸では、古墳時代前半期の遺跡がいくつか発見されている。三部竹崎遺跡は、布留式土器の小型三種のうち小型丸底壺や小型器台が出土しており注目される。

これらの遺跡を背景に北山に大寺古墳が、神西湖南岸においては山地古墳が出現するのではないかだろうか。

古墳時代中期・後期の集落遺跡はよくわかっていないが、神戸川左岸・神西湖周辺の両地域とも多くの古墳が出現する。平野中心部では大念寺古墳・上塩治樂山古墳・地蔵山古墳など首長墓が築造され、神戸川左岸では妙蓮寺古墳・放れ山古墳・宝塚古墳・大槻古墳などの横穴式石室を有する古墳が築かれる。また、神戸川の平野入り口にあたる丘陵には刈り山古墳群が築かれる。また、これらの横穴式石室の出現にやや遅れて横穴墓も導入される。上塩治横穴墓群・井上横穴墓群・地蔵堂横穴墓群・神門横穴墓群・深田谷横穴墓群・神西湖周辺では神待山横穴墓群・九景山横穴墓・正久寺横穴墓群・湖東谷横穴墓群・安子神社横穴墓群・八幡宮横穴墓群・松崎谷横穴墓群・水原横穴墓群など各所に横穴墓群が形成されるようになる。

第3章 天神遺跡の概要

天神遺跡は、トレントによる範囲確認調査なども含めると、これまで8回の調査が行われている。

第1次調査（1972年）では、区画整理事業に伴い計6カ所が調査されている。現在の国道より東の1～4調査区では、弥生時代中期後半の壺棺墓や溝などが検出されており、弥生時代を中心に古墳時代後期、中期の遺構も検出されている。国道より西側の5・6調査区では古墳時代終末期の遺構遺物が中心に検出されている。

第2次調査（1975年）でも国道の東側の第1調査区では弥生時代中期中葉と古墳時代後期の土壙墓や溝が検出されている。国道西側の第二調査区では、建物6棟と溝状造構6本が検出されている。このうちSB01は検出部分で2間4間の純柱の建物で、柱穴は径1～1.2m・深さ60cmの大きなものである。他に2棟がこれと棟軸を同じくし柱穴も同じ様相をしている。遺構の時期は出土遺物から下限を奈良時代としており、官衙的な施設と考えられている。

78年には出雲考古学研究会により、自主発掘が行われた。遺構としては古墳時代中期の土器溜りが検出されている。また、遺構には伴っていないが弥生中期末・土師器・須恵器・縁釉陶器が出土している。また、隣接の畑から「早天」とかかれた墨書き土器も採取されている。

第4次調査（1981年）では、奈良時代の掘立柱建物や溝が検出されている。

第5次調査（1985年）では、現在の建設省山雲工事事務所所在地が調査対象となり、弥生時代中期の十塚墓群と考えられる遺構や、古墳時代後期と考えられる堅穴住居址及び溝状造構などが検出されている。

調査 次数	調査年	調査主体	調査面積	備考
1	昭和47年（1972）	出雲市教育委員会	トレント調査	文献1
2	昭和50年（1975）	出雲市教育委員会	トレント調査	文献2
3	昭和53年（1978）	出雲考古学研究会	210m ²	文献3
4	昭和56年（1981）	出雲市教育委員会	トレント調査	文献4
5	昭和60年・61年	出雲市教育委員会	300m ²	文献5
6	昭和61年（1986）	出雲市教育委員会	トレント調査	文献6
7	平成6年（1994）	出雲市教育委員会	1,200m ²	文献7
8	平成6年・7年	出雲市教育委員会	900m ²	本報告書

天神遺跡調査一覧



第4図 天神遺跡調査位置図

第6次調査（1986年）では、天神大満宮の南側にトレンチにより6カ所が調査されている。

天神遺跡の南端にあたる第2トレンチでは、幅3m・深さ1.2mの弥生時代中期の比較的大きな溝が検出されており注目される。その他の調査区では奈良から平安時代の遺構・遺物を中心に検出されている。

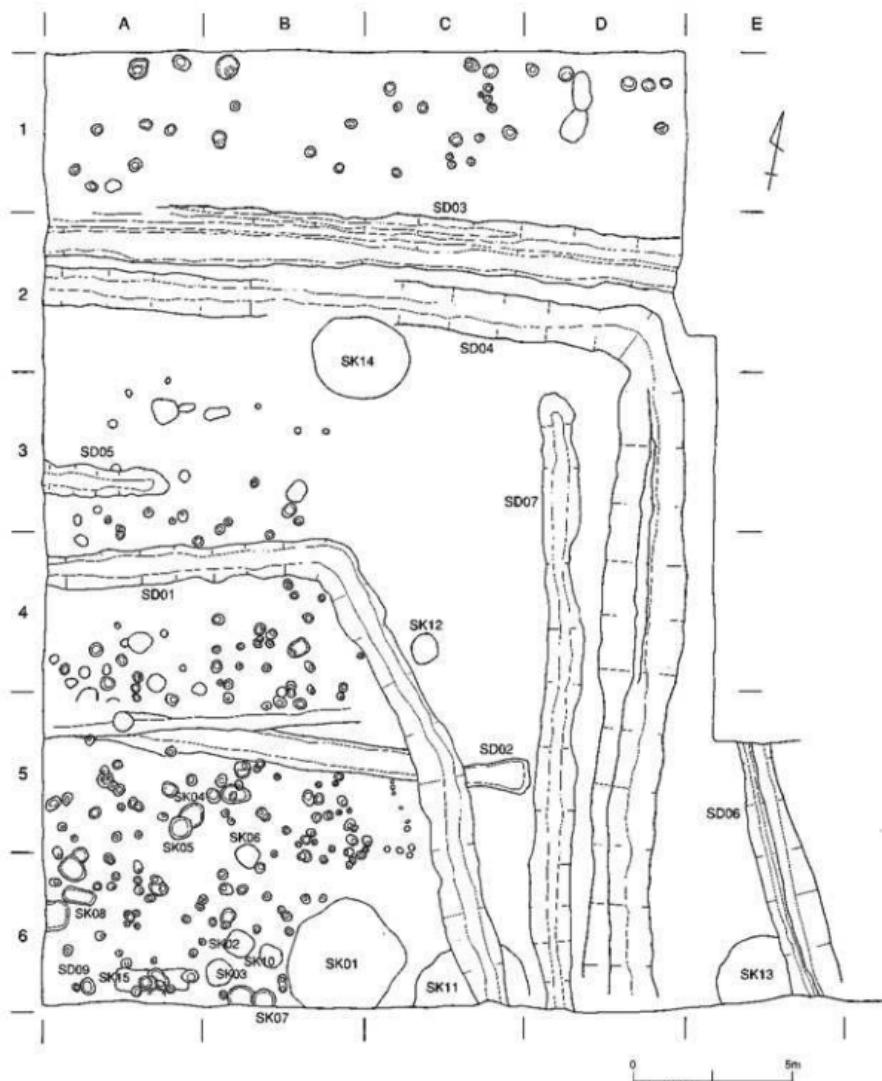
第7次調査（1994年）では、出雲市駅付近連続立体交差事業に伴い天神遺跡の北端にあたるJR山陰線にそって東西に280m区間の調査を行っている。このときの調査でも弥生中期と終末期の環境と考えられる溝が検出されており、弥生時代の木製品が大量に出上している。

これまでの調査を概観すると、国道より東側では弥生時代の遺構が比較的良好な状態で検出されている。一方国道東側では弥生時代の遺構遺物も検出されているが、古墳時代終末から奈良・平安時代にかけての遺構・遺物が中心となっている。

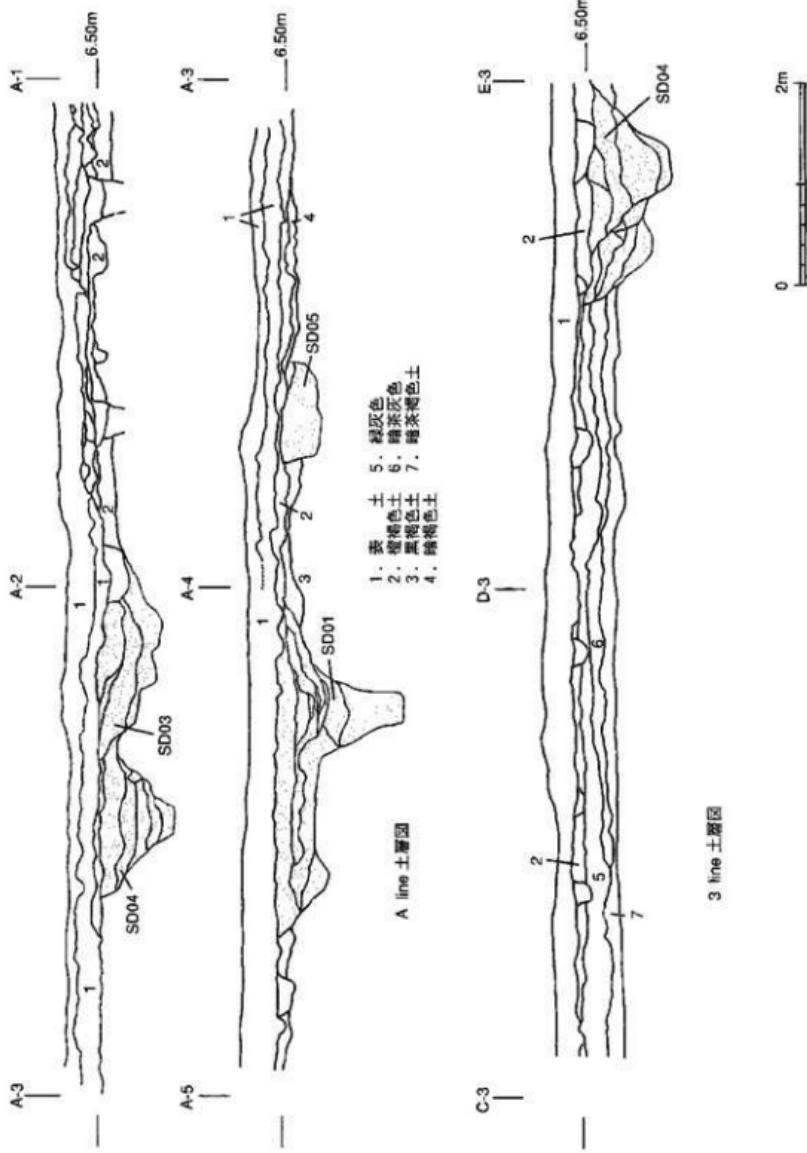
天神遺跡の東には弥生時代の集落と考えられている高西遺跡が隣接しており、天神遺跡の東側と一緒にの集落を形成していた可能性が考えられる。

文 献

1. 出雲市『出雲市天神遺跡 調査の記録』 1972
2. 出雲市『天神遺跡』 1977
3. 出雲考古学研究会『天神遺跡の諸問題-78年発掘調査報告-古代の山雲を考えるⅠ』 1979
4. 出雲市教育委員会『建設省職員宿舎新築に伴う天神遺跡発掘調査報告書』 1982
5. 出雲市教育委員会『建設省新庁舎建築に伴う天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ』 1986
6. 出雲市教育委員会『塩冶地区遺跡分布調査Ⅱ』 1987
7. 出雲市教育委員会 1997 発刊予定



第5図 遺構配置図



第6図 調査区土層図

第4章 調査の概要

(1) 調査の概要

今回の調査地は国道の西側で天神遺跡の北端にちかく、遺跡の中心部と思われる大神天満宮や高西公園付近の標高が約8mに対して6.8mとかなり低くなっていることから、遺跡の縁辺部に位置する。

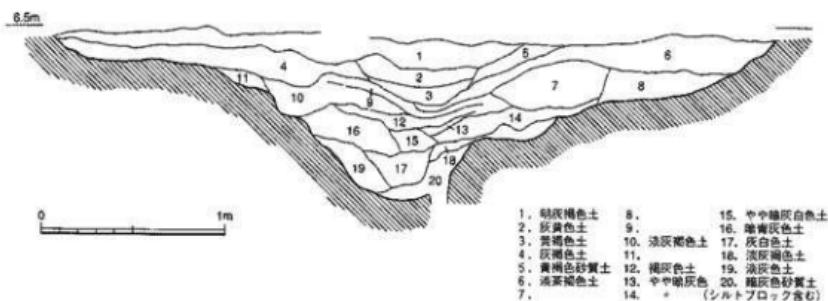
現在は荒れ地となっているが以前は水田や桑畑として利用されていたようである。表土直下には畝に伴う幅20cmほどの溝が南北方向に多数検出された。このため耕作による搅乱等で良好な包含層は残っておらず大半の遺構は地山での検出となった。

検出された遺構は溝とPitが大半を占める。規模の大きな溝は近世以降の溝で用水等のために使用されたようである。Pitと土壌は平安時代から中世のものと思われ、調査区の西南隅と北端の2カ所で集中して検出されている。

(2) 遺構と遺物

S D01

この溝は調査区の南側で検出されている。A4～B4区にかけては東西方向に延び調査区中央B4区で屈曲して南に方向を変えている。幅は上端90cm・下端で30cmを測り逆台形になっている。深さは80cmを測る。東西方向に延びるA4～B4区での断面は深さ60cmまで約70度で傾斜し、下半分はほぼ垂直に落ちており傾斜のきつい掘り形である。底は水平で幅30cmほどである。また、この溝の両側は周辺より弱冠低くなっている。特に溝の南側と西側は幅1.8mの範囲が緩やかに傾斜している。溝が掘り込まれている土層はシルト層～砂礫層



第7図 SD01土層図

まで達しており、溝の底付近の壁がオーバーハングしているところや崩壊しているところも観察された。この溝は出土遺物から近世以降の用水路と考えられるが、比較的水量が多かったものと思われる。

出土遺物には、須恵器・土師器・土師質土器・白磁等の小片があるが唐津焼が含まれることから近世の道構と思われる。図化できたのはこの時期の土師質土器の坏1点である。口縁は逆ハの字に直線的に外反している。器壁はやや厚く、底部の糸切り痕は粗く、胎上は精製されており砂粒はほとんど含まない。

S D02

この溝は東西方向に延び東側は S D07 まで、西側は調査区外へと延びている。幅1.1m・深さ37cmを測る比較的浅い溝である。断面は皿状を呈し、底には凹凸がある。出土遺物から時期は中世と思われる。この溝の両側には多くの柱穴が検出されていることから中世の集落に伴う溝と思われる。

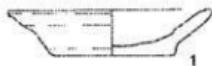
出土遺物としては、須恵器・土師器が出土している。(1)は山本編年Ⅲ期の坏身である。口縁立ち上がりや受け部は比較的丁寧な作りをしているが、底部外面の中心部の削りは雑である。(2)は須恵器の甕である口縁端部外面に平坦面を持つ。(3)も須恵器甕の底部であるが、平行叩き目で内面には当て具痕を残さないことから中世須恵器と思われる。(4)は大半を欠損しているが、上製支脚である。脚部と腕部の接合痕が明瞭である。また脚部の背後に孔が施されている。

S D03

この溝は調査区北側を東西方向に延びており、幅は約2m・深さ60cmを測る比較的大きな溝で、S D04 と平行に延びており、S D03 が S D04 を切っている。断面は皿状を呈しかなり緩やかな傾斜となっている。10層や11層～13層は7～9層に切られているよう観察できることから掘り返しがあった可能性もある。出土遺物としては、近世の陶磁器片が出土している。

S D04

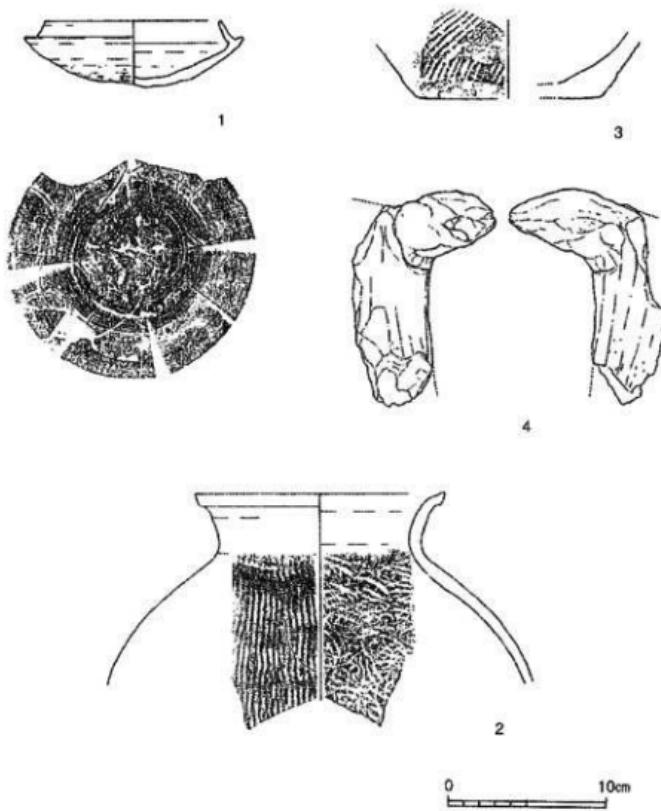
この溝は調査区内をL字にはしっており、S D03の南側を東西方向に平行して延びており、



0 10cm
第8図 SD01出土遺物

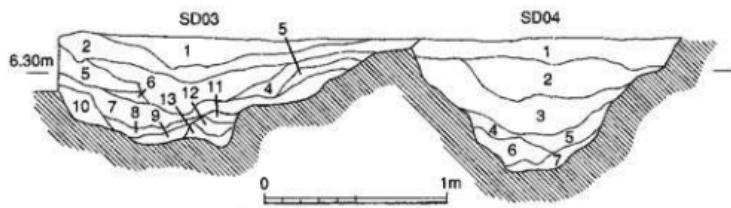


0 1m
第9図 SD02断面図



第10図 SD02出土遺物

東側で直角に曲がり調査区外へと南に延びる。幅1.5m・深さ70cmを測り断面は逆台形を呈する。また、この溝の南北方向に延びるD3~6区については、溝の西側の幅80cmほどは互相状に上が堆積している。これは溝の側壁が崩れたために人为的に土を盛ったものと思われる。盛り土は地山のシルトと灰色土を交互に盛っている。盛り土の部分も入れた溝の幅は2.2mを測る。遺物としては、土師質土器・擂り鉢・白磁など中世の遺物がまとまって出土しているものの、陶磁器片がいくつか出土していることから、この溝も近世以降のものと思われる。



- | | |
|--------------------------|------------|
| 1. 浅黄色土 | 2. にぶい黄褐色土 |
| 3. 淡黄褐色土 | 4. にぶい黄褐色土 |
| 5. にぶい黄灰色土 | 6. 黄灰色土 |
| 8. 暗灰白色 | 7. 灰白色土 |
| 11. 暗灰色土 | 9. 單白色土 |
| 12. 暗灰色土 (シルトの小さなブロック含む) | 10. 單灰色土 |
| 13. 暗灰色土 (シルトの大きなブロック含む) | |
- | | |
|----------|-------------|
| 1. 浅黄色土 | 2. にぶい褐灰色土 |
| 3. 褐色土 | 4. 暗褐色土 |
| 5. 暗黄灰色土 | 6. 黄褐色土砂しき層 |
| 7. 黄褐色土層 | |

第11図 SD03・SD04土層図



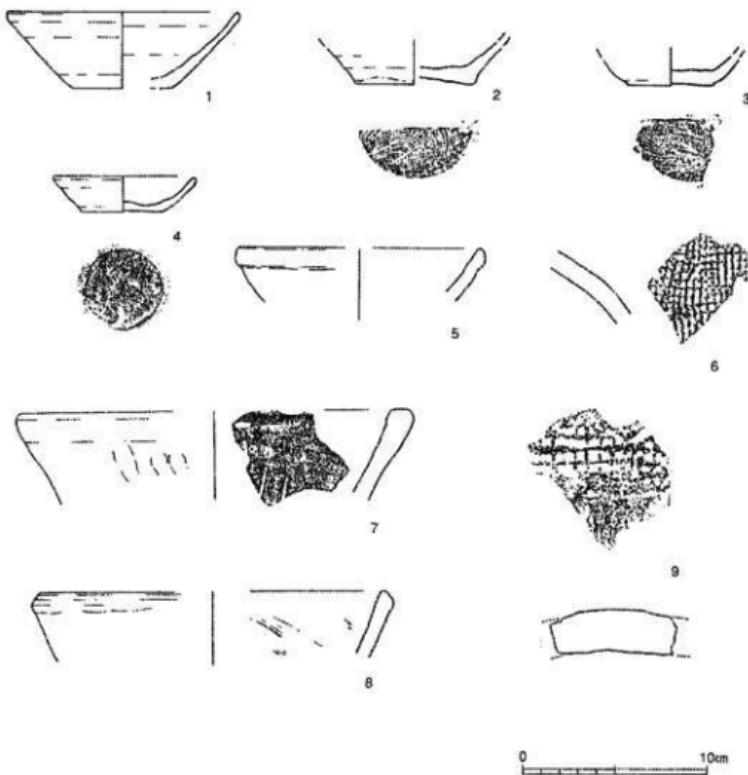
- | | |
|-----------|---------------------|
| 1. にぶい黄色土 | 7. 黄灰色土 |
| 2. 浅黄色土 | 8. 黄色シルトブロック |
| 3. 灰黄色土 | 9. 暗黄褐色土 |
| 4. 暗灰黄色土 | 10. 灰色土 (シルトブロック含む) |
| 5. オリーブ灰色 | 11. 單灰色土 |
| 6. 黄褐色土 | 12. オリーブ黄色 |

第12図 SD04土層図

図(1)～(3)は土師質土器の坏である。(1)は口縁部は直線的に延び、先端は上方に薄く延びる。(3)は口縁部は残っていないが、底部からの立ち上がりはやや内湾気味である。(4)は同じく小皿である。口縁部は逆ハ字形に開き比較的長く、端部は薄く延びる。(5)は白磁碗の口縁部で正線を呈する。(6)は壳片で格子状の叩きが施されている。(7)は瓦質の擂り鉢で、口縁部はやや丸みを帯び厚くなり端部上面に平坦面を持つ。(8)は土師質の擂り鉢とこね鉢の口縁部である。(9)は土師質のこね鉢で口縁端部は外面に平坦面を持っている。

SD05

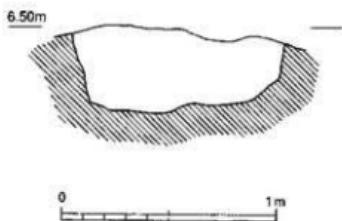
調査区西端A3区で溝の東端を検出した。大半は調査区外へ延びているものと思われる。幅1m・深さ40cmを測る。断面は逆台形で垂直気味に落ちている。遺物は出土していないので



第13図 SD04出土遺物

時期は不明であるが、溝の規模などからSD02と同じような性格の可能性が考えられる。
SD06

調査区南東隅E5・6区で検出した。南北方向に延びており、幅は上端で1.5m・深さ80cmを測る。断面は他の溝と異なっており、掘り鉢状に落ち、底は幅30cm・深さ35cmでさらに1段下がるかたちとなっている。この



第14図 SD05断面図

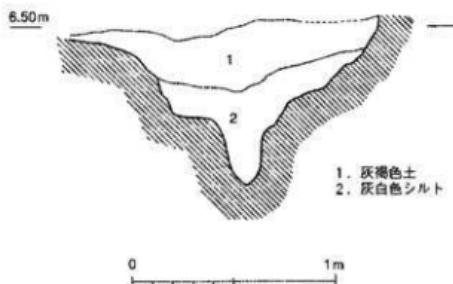
溝は中世の上層である SK
13を切っている。

SD07

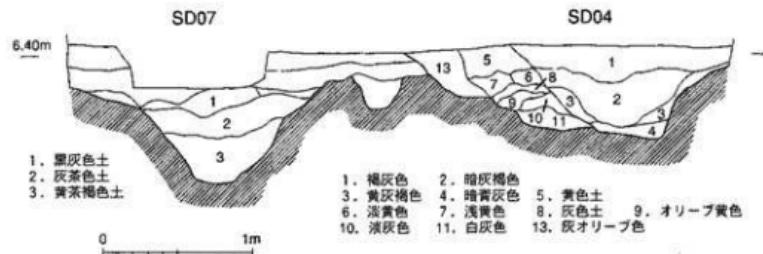
この溝は調査区中央より
やや東を南北に SD04 に平行して延びており、南は調査区外である。幅1.23m・
深さ64cmを測り、断面は逆台形を呈する。SD04より層位的に古く、出土遺物から中世のものと思われる。

この溝より東には柱穴等があまり検出されておらず、溝より西側に遺構が集中していることから、集落のなかを区画する溝のようなものかもしれない。

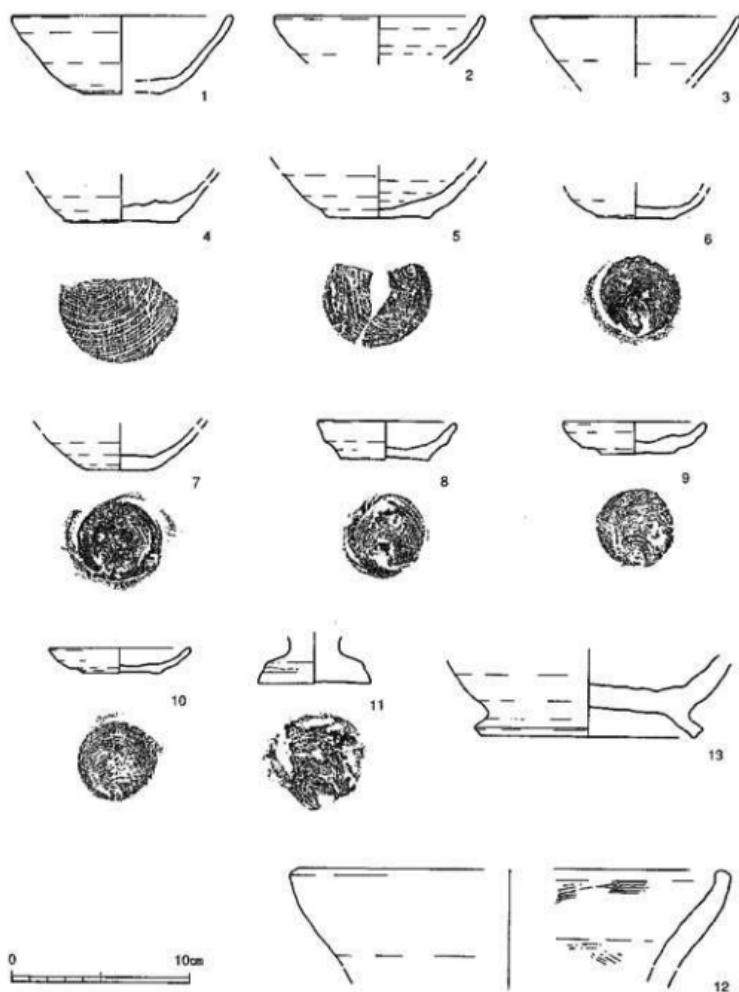
出土遺物としては、土師質土器が比較的まとまって出土している。(1)～(7)は土師質土器の壊である。(1)～(3)の口縁部は直線的に開いており、端部はそのまま丸く收める。底部は糸切り痕が明瞭である。(8)～(10)は小皿である。(11)は柱状高台である。(12)はこね鉢の口縁部である。端部は丸く内側に肥厚する。



第15図 SD06土層図



第16図 SD04・SD07土層図



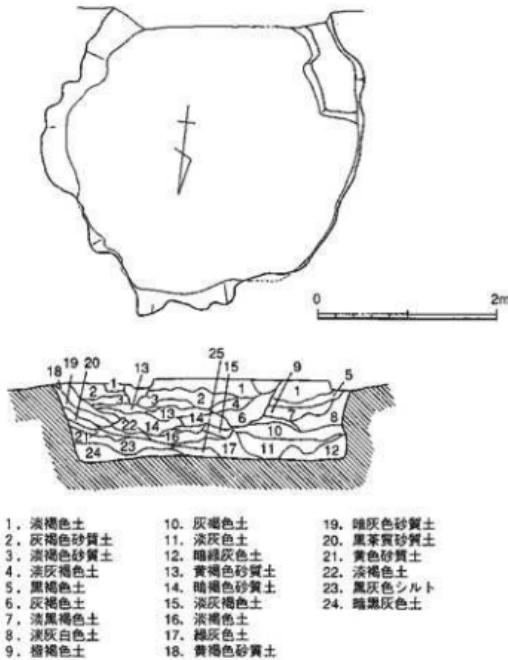
第17図 SD07出土遺物

SK01

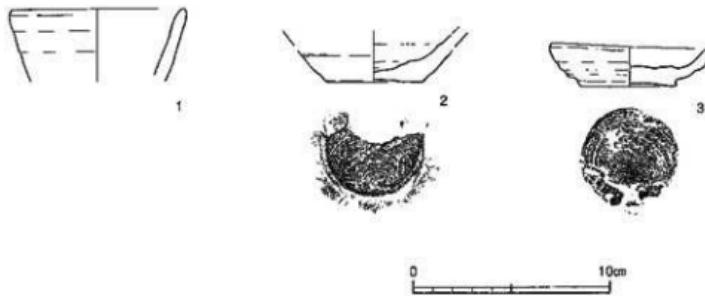
この上塙は、調査区南端のB6区で検出された。一部は調査区外へと続いている。東西3.4mとかなり大きな土壙である。埋土はかなり細かく分層することが可能であったが、遺構の性格は不明である。遺物としては須恵器・土師器の小片が出土しているが、図化できるものはわずかであった。(1)～(3)は上師質上器である。(3)は、底部の器壁が厚く端部は断面が方形になる。底部は糸切り痕が明瞭である。内外面とも煤が付着している。

SK02

この土壙は、B6区で検出された。東西88cm・南北82cm・深さ26cmの不整円形プランである。土壙の壁はほぼ垂直に落



第18図 SK01



第19図 SK01出土遺物

ち、底は皿状を呈する。遺物としては、常滑焼と青磁の小片が出土している。

S K03

この土壙はB 6区で検出されている。直径85cmの方形プランを呈する。深さは20cmを測り、断面は皿状を呈する。遺物は瓦質の掘り鉢と赤色塗彩した土師器の环と思われる小片が出土しているほか、須恵器と上師質土器の小片が数点出土している。

S K04

この土壙は、A 5区で検出されている。南側をSK05に切られており、現状から径75~90cmの楕円形プランを呈していたものと思われる。深さ10cmと浅いが、北側には径25cm~30cm・深さ12cmのPitが掘り込まれ2段になっている。

出土遺物としては、土師質土器の小片が2点出土している。

S K05

この土壙は、A 5区で検出されておりSK04を切っている。直径径75~80cmを測る円形プランで、深さ27cmを測り断面は逆台形を呈する。出土遺物としては、土師質土器の小片が一点出土している。

S K06

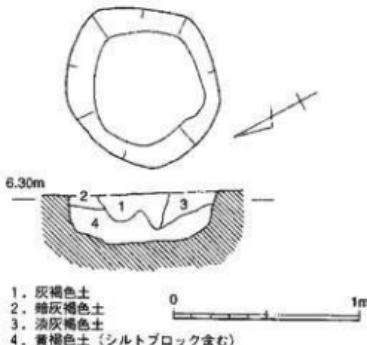
この土壙はB 5・B 6区で検出されており、直径70~75cmの隅丸方形プランである。深さは27cmで断面は皿状を呈する。遺物は出土していない。

S K07

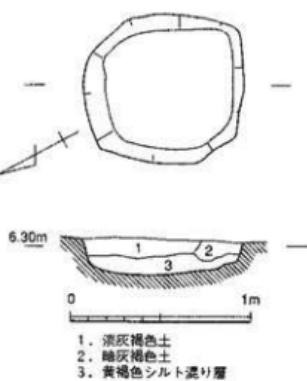
この土壙は、調査区南端B 6区で検出されており一部は調査区外へと延びる。径77cmの円形プランを呈する。深さは28cmを測り、断面は皿状を呈する。出土遺物としては、須恵器・土師器・土師質土器・瓦質の掘り鉢の小片がある。

S K08

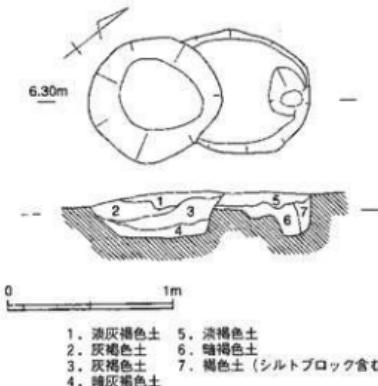
この土壙は、調査区南西のA 6区で検出されており、幅50cm・長さ105cmの長方形プランを呈する。他の土壙とは形態を異にしており土壙墓であった可能性もある。横断面は皿状を



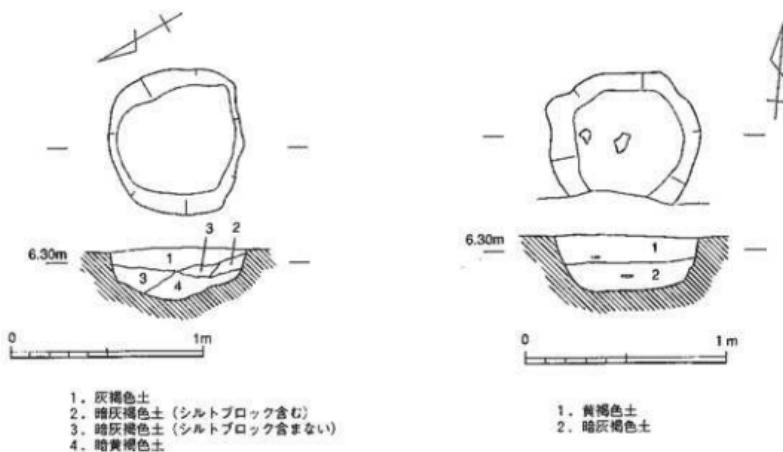
第20図 SK02



第21図 SK03



第22図 SK04・SK05



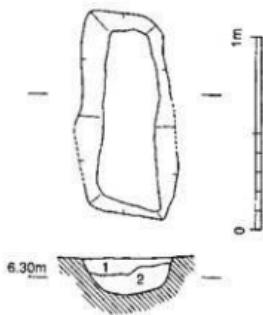
第23図 SK06

第24図 SK07

呈し埋土は比較的しまりのある土層である。遺物は出土していない。

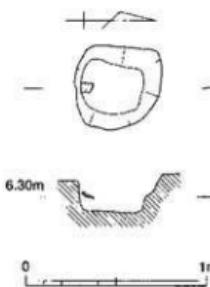
S K09

この土壤は、調査区南西A 6区で検出されており、直徑45cmの他のものと比較すると規模の小さな土壠で不整円形プランを呈する。底は平坦である。遺物は土師器が1点のみ出土し



1. 黄灰色
2. 暗灰褐色（シルトブロック含む）

第25図 SK08



第26図 SK09

ている。高台のついた土師器の坏で内外面に赤色塗彩されている。口縁部は上部3分の2が外側に開き、端部はそのまま丸く收める。高台は断面が三角形で短小である。

S K 10

この土壤は、B 6区で検出されており、直径63cmを測る不整円形プランである。深さは17cmを測り、底は凹凸がある。遺物は出土していない。

S K 11

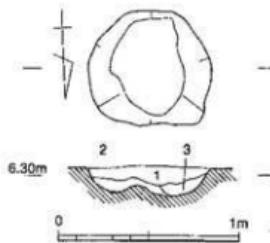
この土壤は、調査区南端C 6区で検出しておおり南半分は調査区外である。また検出部分もSD01に切られており、一部しか残っていない。径は上幅が3.8m・下幅2.4mを測り正円形に近いプランになると思われる。SK01と同じような大きさでかなり大きな土壤である。深さは1mで砂礫層まで達しており湧水が著しい。遺物は土師質土器、須恵器の小片が大半である。固化できたものに青磁の椀の底部がある。底部内面に文様がある。

S K 12

この土壤は調査区の中央C 4区で検出された。径80~95cmを測る不整円形プランを呈す

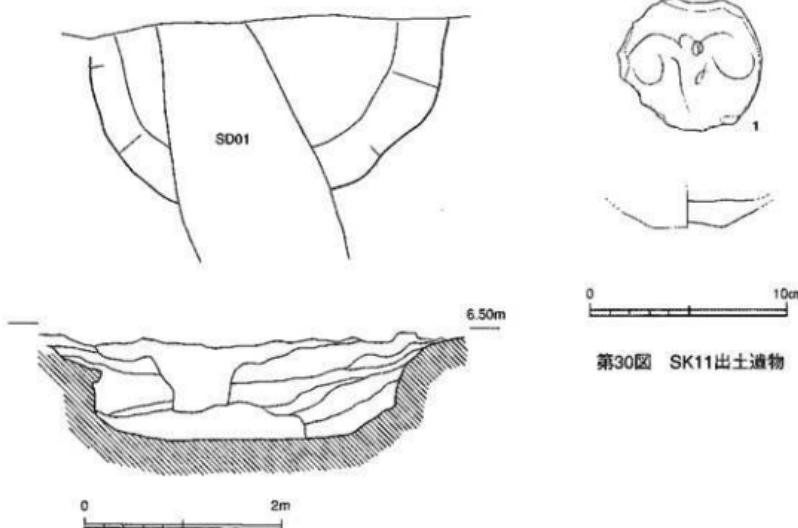


第27図 SK09出土遺物

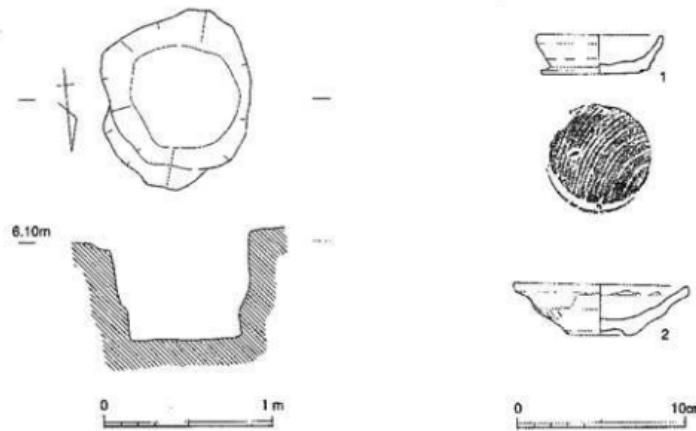


1. 黄褐色土
2. 暗灰褐色土
3. シルトブロック

第28図 SK10



第29図 SK11



第31図 SK12

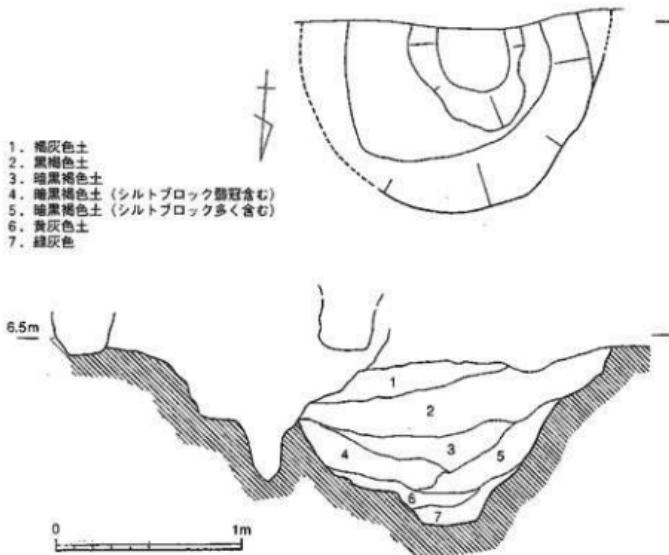
第32図 SK12出土遺物

る。深さは66cmを測り断面は方形である。底は径65cmと比較的広く水平である。出土遺物などから近世の墓壙と考えられる。

出土遺物は土師質土器と唐津焼が完形で1点ずつ出土している。土師質土器は径7.8cm・高さ2.3cmを測る小皿で、口縁部は逆ハ字形に開き、端部はやや薄くなる。底部の糸切り痕は明瞭である。SD01出土のものと胎土やつくりが共通している。唐津焼の皿は、内面全体と外面は口縁端部に釉がかかっている。高台は切り高台である。

SK13

この土壙は調査区南端E6区で検出されており、南半分は調査区外にあり、東半分はSD06によって切られている。現状から推定すると直径1.8mほどの円形プランになると思われる。断面は描り鉢状に傾斜しており深さ75cmの所で2段になり、底は径50cm・深さ18cmの皿状の落ち込みになっている。



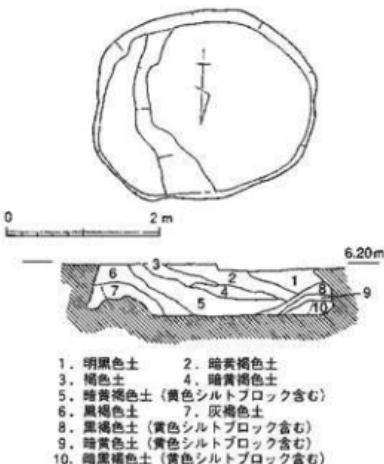
第33図 SK13

SK14

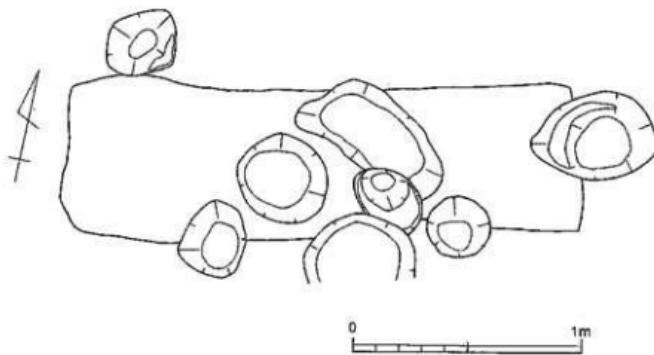
この土壌は、調査区中央やや北側で検出されておりSD04を切っている。平面プランは楕円形を呈し、東西1.45m・南北1.25mを測る。底は2段になっており西側が高くなっている。また、掘り方がオーバーハンプしているが、これは砂礫層まで達していることから崩れたものと思われる。このため埋土には砂礫や黄色シルトをブロック状に含んでいる。

SK15 (土壌墓)

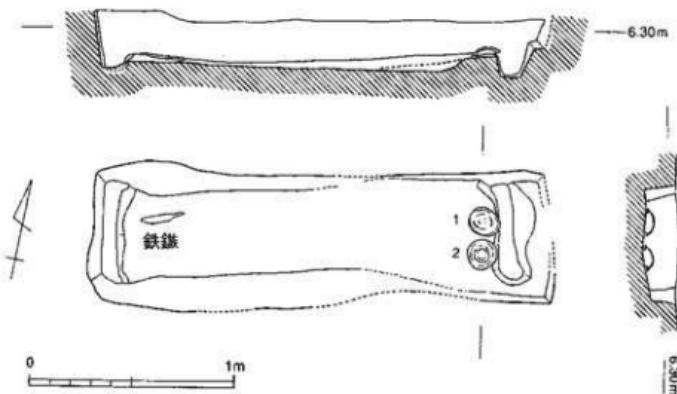
この遺構は調査区南西隅A6区で検出された。調査区内で最も遺構が集中して検出されている所であるため、多くのPitによって切られており遺構の上端は一部しか残っていない。土壌墓の規模は長さ2.29m・幅0.64mを測る。深さは現状で18~28cmで、床面は頭位方向と考えられる東側が最も高くなってしまっており、最も低い中央部にかけてゆるやかに傾斜している。また床面東西の両端には棺材をはじめ込んだと思われる溝が設けられている。西側のものは土壌の立ち上がりに接して土壌の幅いっぱいに、長さ11cm・深さ8cm



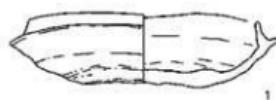
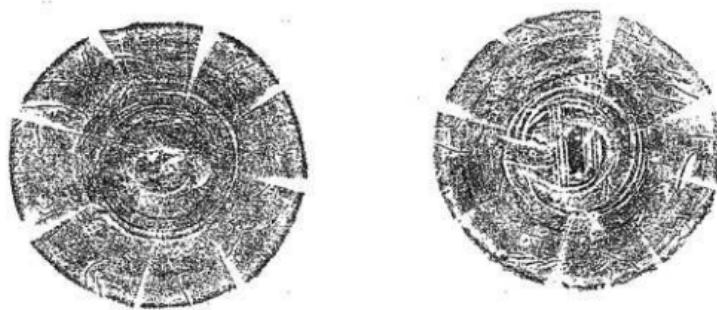
第34図 SK14



第35図 SK15検出状況



第36図 SK15



0 10cm

第37図 SK15出土遺物(1)

で掘り込まれている。東側の溝は土壙の東側と南側の立ち上がりより5~10cm間をおいて掘り込まれている。深さ10~15cmを測る。また、東側の掘り込みの内側には接するようにして須恵器の坏身が2点並んで出土しており、枕に転用されたものと思われる。須恵器の出土地点が床面では最も高くなっている。また、西北隅から鉄鎌が一点出土している。

出土遺物

(1)・(2)は枕に転用された坏身である。(1)は口径10.9~11.7cm、最大径12.9~13.8cm・高さ3.7cmを測り、口縁部は歪みを生じている。底部のヘラ削りは単位が不明瞭である。(2)は口径10.4cm・最大径12.6cm・高さ3.8cmを測る。全体的にシャープさを欠き、1~2ミリの砂粒を多く含むなどつくりが悪い。底部のヘラ削りは雑で単位は不明瞭である。中心部は板目痕が残っている。

鉄鎌は、逆刺椿葉式のもので長さ16.5cmを測る。鎌身部は測線が中ほどからやや内湾気味になり逆刺へとづく。頸部は中ほどがやや狭くなり範被部がややふくらみ斜め関となる。



第38図 SK15出土遺物(2)

写 真 図 版



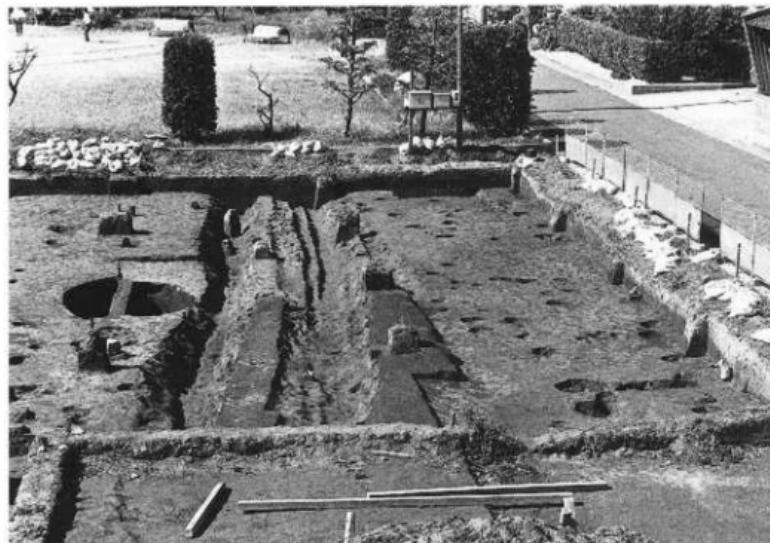
1 調査前全景



2 完掘状況（東から）



1 完掘状況（南から）



2 完掘状況（SD03・SD04周辺）



1 完掘状況（調査区南西部分）



2 SD01土層堆積状況

图版 4



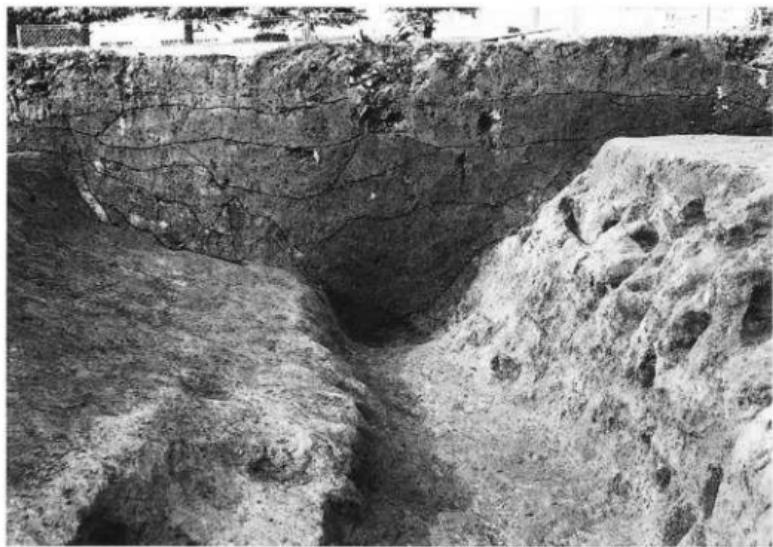
1 SD02



2 SD02遺物出土状况



1 SD03土層堆積状況



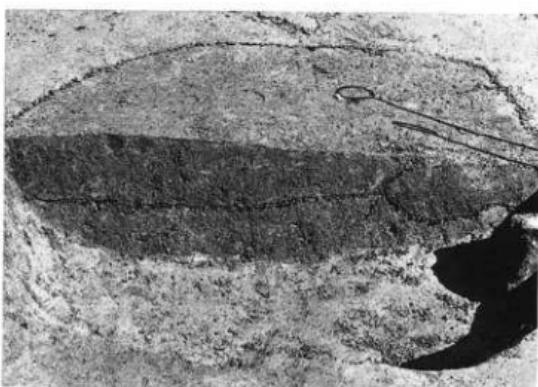
2 SD04土層堆積状況



1 SD07土層堆積状況



2 作業風景



1 SK03半探状况

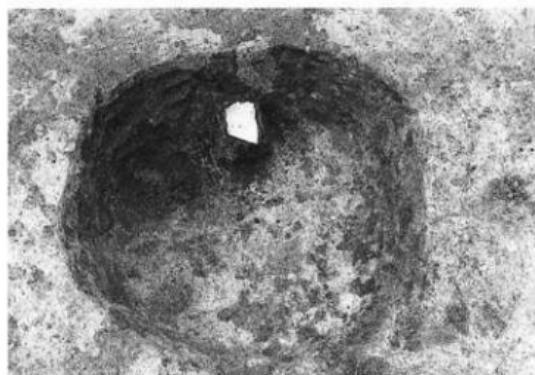


2 SK05・SK04半探状况



3 SK07完掘状况

図版 8



1 SK09完掘状況



2 SK13発掘状況

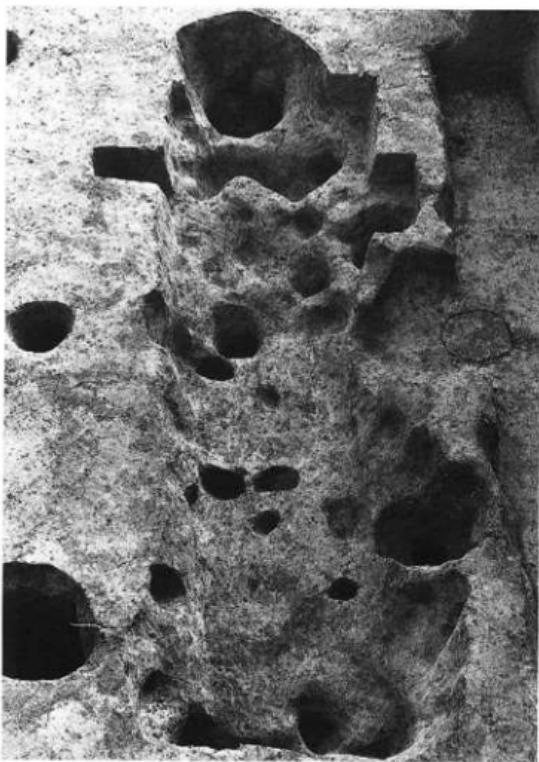


3 SK14発掘状況

1 SK15遺物出土状況



2 SK15完掘状況



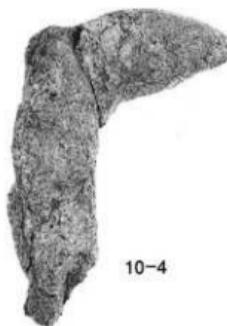
圖版10



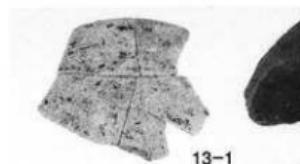
1 SD01出土遺物



2 SD02出土遺物



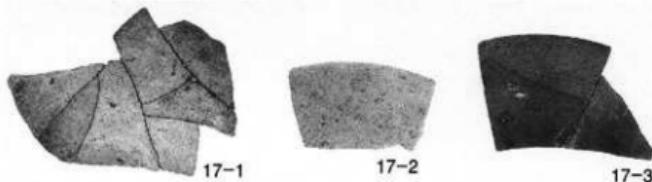
3 SD02出土遺物



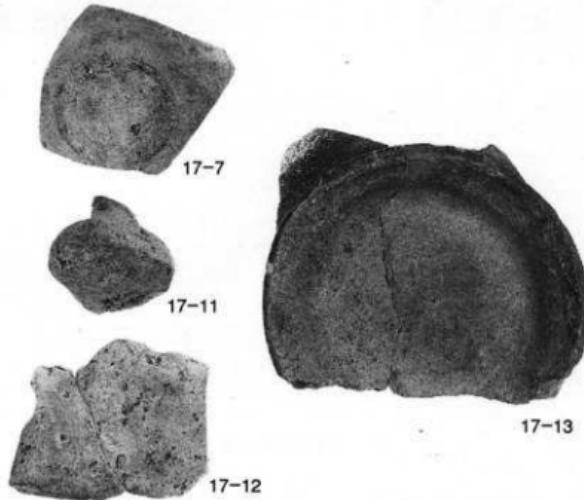
4 SD02出土遺物



1 SD07出土遺物



2 SD07出土遺物



3 SD07出土遺物



19-1



19-2



19-3

1 SK01出土遺物

2 SK02出土遺物



27-1



30-1

3 SK09出土遺物

4 SK11出土遺物



32-1



32-2

5 SK12出土遺物



37-1



37-2



38-1

1 SK15出土遺物

建設省職員宿舎新築工事に伴う
天神遺跡第8次発掘調査報告書

1996年3月

発行 出雲市教育委員会
印刷 伊藤印刷